

## コロナ禍における生存学研究所の情報保障について ——障害学会編——

安 田 智 博

(立命館大学大学院先端総合学術研究科)

### 1. 本報告の構成と目的

本報告の構成として、はじめに2020年9月19日に開催した、「第17回障害学会大会・2020 オンラインシンポジウム」<sup>1)</sup>のことを述べていく。この項目では、情報保障に対する認識の甘さと企画趣旨とのズレによって、情報保障を活かしきれなかった背景を説明する。準備期間から当日のオンラインシンポジウム開催までに起きた問題を明らかにし、今後の運営に生かすべく、反省すべき点を纏めたものである。ただし予め断っておくと、第17回障害学会大会でのオンラインシンポジウム自体は登壇者の方々のご活躍により、盛況のうちに幕を閉じた。したがって、本報告は登壇者やシンポジウムに対する批判を意図しているものではない。あくまで本報告で取り上げるのは、運営側の情報保障に関する認識の甘さから起きた情報のバリアであり、シンポジウムへの参加の際の障壁についてである。したがって、本報告の前半部では、第17回障害学会大会・2020 オンラインシンポジウムで起きた、「情報のバリア」について説明する。

そして次に、翌年の2021年9月25日に開催した、「第18回障害学会大会・2021 オンラインシンポジウム」<sup>2)</sup>について言及する。ここでは、昨年の第17回障害学会大会の反省を踏まえた取り組みを説明する。こちらも第17回障害学会大会の時と同様に、準備期間から開催時までの取り組みを述べつつ、前回大会で起きた「情報のバリア」を踏まえて、どのようにバリアフリーな環境を構築したのかを説明したものである。最後に、第17回と第18回の障害学会大会の取り組みを通じて、今後の課題に触れていく。

### 2. 第17回障害学会大会・ 2020 オンラインシンポジウム

#### 2-1 事務局の対応の不備

第17回障害学会大会・2020 オンラインシンポジウム

での最も反省すべき点は、「スケジュールと段取り」である。第17回障害学会大会では、そもそもスケジュール調整と段取りがうまくできなかったことが事の発端である。

スケジュール調整と段取りが上手くいかなかったことで生じた問題はいくつもあるが、とりわけ視覚障害者や聴覚障害者に対してバリアとなる状況の把握と、その対応に時間をとれなかったことが挙げられるだろう。当事者からオンライン化によるバリアフルな環境について相談する機会を設けなかったため、その結果、当事者に不利益を被るイベントとなってしまった。したがって、事前に運営は、情報のバリアを検討するための段取りを組む必要がある。

さらに、2020年のオンラインシンポジウムでは、このとき初めて運営はZoomのウェビナー機能を使用した。詳細な経緯はここでは省くが、要するに事務局は、ウェビナー機能とミーティング機能の使い方の違いを十分に理解しないまま、普段使用しているミーティングと同じ機能であるとの認識で臨んでしまった。その結果、当日は運営に混乱が生じたのはいわずもがなである。

また、タイムスケジュールにも問題があった。2020年のオンラインシンポジウムでは長丁場の企画にもかかわらず、途中で休憩時間を挟まないことや終了時間を越えて催しを続けたことで、参加している当事者はもちろんのこと、文字通訳者や手話通訳者にも身体的ないしは精神的な負担をかけさせてしまった。

#### 2-2 情報のバリアとなってしまった三つの要因

第17回障害学会大会・2020 オンラインシンポジウムでは、手話通訳者2名と文字通訳(captiOnline<sup>3)</sup>使用)で情報保障を行ったが、本項ではバリアフルとなってしまった三点について言及する。

まず一点目は、「話し始めるときには必ず名前を名乗ってもらおう」点である。第17回障害学会大会のような複数人が登壇しているオンラインシンポジウムにおいて、事前に登壇者が話し始めに必ず名前を名乗らないと、視覚

障害者にとっていま誰が発言しているかが認識しづらく負担になる。名乗りを周知しきれなかったことが、バリアの要因に挙げられる。補足しておく、シンポジウム開始前に登壇者に向けて名乗りについてアナウンスはしていたが、議論が進行していくなかで疎かになってしまう場面が増えていった。このような状況になった際は、進行役である司会の方で、議論に介入する形で周知してもらうよう徹底する必要がある。

次に二点目が、「手話通訳の画面の大きさの確保と位置の固定」ができないことで生じたバリアである。第17回障害学会大会のオンラインシンポジウムでは、登壇者が多いことから入れ代わりの多いシンポジウムとなった。したがって、複数人の登壇者が画面上に同時に映ってしまい、画面の細分化によって手話通訳者や文字通訳の画面がみえにくくなってしまった。事前に画面が小さくなる可能性は考慮していたものの、話し手以外の登壇者が画面上に映っていると、通訳者がどの話者を通訳しているのかがわかりにくい状況となってしまった。また、カメラのオン／オフの切り換えによって、その都度、手話通訳や文字通訳の画面が移動してしまうことで、通訳の画面を追うのに意識をとられ、当事者にとって負担をかけるイベントとなってしまった。

最後に三点目が、複数人の登壇者から意見を求める場合には、司会進行が「バリア」を強く意識する必要があるということだ。運営側では強制的に登壇者のカメラの切り換えを行わず、登壇者自身で切り換えるようあらかじめ要求していたが、議論の進行上、カメラの切り換えを失念してしまうことが起きた。このような事態が起きた場合、議論中でも司会が間に入って注意を促す必要がある。また、運営側も議論中に介入しないという判断をとったことが、結果的に視覚障害者や聴覚障害者のバリアへとつながった。このようなバリアを作らないためにも、入念なりハーサルはもちろんのこと、当事者の方に協力してもらい、「情報のバリア」となる点を事前にチェックしてもらう必要がある。したがって、以上の三点が第17回障害学会大会時の情報保障に関する課題である<sup>4)</sup>。

### 3. 第18回障害学会大会・ 2021 オンラインシンポジウム

#### 3-1 つなぎ役の存在と役割分担

前節での反省を踏まえて、ここからは「第18回障害学会大会・2021 オンラインシンポジウム」の取り組みにつ

いて述べていく。2021年のオンラインシンポジウムでは、前回大会の反省を生かして入念なミーティングとリハーサルを行った。その際に、発言時に名前を名乗ってもらうことを発言者や司会者には事前にしつこくお願いをし、とりわけ司会者には、リハーサルやミーティングの段階から参加してもらい、情報保障への理解を深めてもらった。

2-2で挙げた、Zoomのウェビナー機能の確認や、画面の切り換えや固定といった画面上の状況を把握するには、複数の協力者と複数のツールが必要になる。ツールに関しては、最低でもパソコン2台とiPhoneとiPadを各1台ずつ用意しなければならない。そういうのも、各ツールに応じてどのように映像がうつっているのかを確認しなければならないからである。また、複数人に協力を依頼する際には、視覚障害者や聴覚障害者への協力も忘れてはならない。当事者のシミュレーションから、「情報保障におけるバリアの要因」を洗い出してもらい、それを踏まえて、どう折り合いをつけていくかを事務局で議論した。

上述のようなやりとりが行えたのは、役割分担と運営の中心となるつなぎ役の存在が大きかった。つなぎ役を中心とし、様々な役割を各々で分担したのである。例えば、タイムキーパー役や、登壇者の方で画面共有が使えないといったトラブル時の代理作業役、そのほかにも動画を流したり、運営からの案内を告知したりする裏方役などといった役割を洗い出し、割り振りを明確化したのである。

さらに役割分担と併せて、当日のコミュニケーション方法も機能に応じて切り分けた。2021 オンラインシンポジウムでは、前回大会同様にZoomを使用しており、チャット欄、Q & A機能、大会専用のメールアドレスといった計三つのコミュニケーションツールを使い分けることにした。まず、チャット欄は運営側からの視聴者に向けたアナウンスや運営側への質問に対する応答に使った。次に、Q & A機能は登壇者への質問のみとし、インターフェイスの関係でQ & A機能が使えない人には、大会専用のメールアドレスに送ってもらうことで、コミュニケーションツールの使い分けを行った。そして、つなぎ役の人が、取り纏めや情報共有が滞りなく行ったことで、情報のバリアやトラブルによる混乱は未然に回避できたのである。

#### 3-2 ユーザーインターフェイスの視点

2021 オンラインシンポジウムでも前回大会同様に

Zoom のウェビナーを用いて、手話通訳者 2 名と文字通訳 (captiOnline と Zoom 画面上の文字通訳投影) の体制で実施した。ただし、今回新しい試みとして「ビデオ画面の順番の固定」が挙げられる。手話通訳者と文字通訳の画面を固定させることが今回の課題であった。方法としては次のようになる。

はじめに、手話通訳者 2 名に向けてスポットライトを当て続ける状態にし、手話通訳の交代時には通訳者自らビデオとマイクのオン／オフをしてもらう。次に、文字通訳のビデオをオンにし、スポットライトは当てずにその状態を維持する。スポットライトを文字通訳に当ててしまうと、手話通訳者の交代のときに文字通訳と手話通訳の位置が入れ代わってしまうので、それを防ぐために手話通訳だけにスポットライトを当てる。この手順によって、画面の左上端を手話通訳の画面とし、右隣りを文字通訳となるようにした。最後に、複数人の登壇者が同時に映らないよう、発言の度にビデオとマイクのオン／オフをしてもらうことをお願いした。したがって、左上端を起点に Zoom の画面構成は次のような順番となる。①手話通訳 ②文字通訳 ③登壇者 ④場面によっては司会 (※参考画像 1 を参照)。



(※参考画像 1：報告者による作成)

ちなみに、Zoom に関してはウェビナー機能とミーティング機能とでは仕様が異なっており、あくまで今回は、500 人規模のウェビナーのケースである。①の手話通訳の画面は、手話通訳者の両名にスポットライトを当てているので、切り換わる際に①の位置に画面が固定されるようにしている。②の文字通訳は画面をオフにしないことで、この位置の状態が維持される。③と④は自身で適宜操作してもらう。

また Zoom には、画面共有機能があり、選択したファイルや画面を参加者にも視聴してもらうことができる。

この画面共有をした時、左右表示モードにしておくと、次のような形でみることができる。この場合であれば、上から順に①手話通訳 ②文字通訳 ③登壇者 ④司会となる (※参考画像 2)。



(※参考画像 2：報告者による作成)

#### 4. 今後の課題

情報保障の確保には、オンラインツールの技術をうまく活用するための創意工夫が必要となる。とりわけツールや機能に関しては常に更新や修正されていくので、それに応じて技術の扱い方を変えていかなければならない。なぜなら、以前使えたことが今後は使えなくなる可能性もあり、以前と同じ方法ができなくなることもあるからだ。そして、2021 年のオンラインシンポジウムは前回大会の反省を踏まえたイベントであったが、今後は「よりスムーズな情報保障をどのように考えていくか」を課題としていきたい。

#### 注

- 1) 障害学会第 17 回大会・2020・オンラインシンポジウムの公式 HP  
<http://www.arsvi.com/ds/jsds2020s.htm>
- 2) 障害学会第 18 回大会・2021・オンラインシンポジウムの公式 HP  
<http://jsds-org.sakura.ne.jp/18-2021taikai/#sympo>
- 3) 正式名称、ウェブベース遠隔文字通訳システム captiOnline (キャプションライン) とは、「ウェブブラウザだけで遠隔から PC 文字通訳を行うことができるシステム」であり、遠隔からでも文字通訳や文章要約をライブで行える専用ウェブサイトのことである。このサイトは筑波技術大学産業技術学部産業情報学科 コミュニケーションサポート研究グループの若月大輔によって開発された。公式サイトは以下の URL を参照。  
<https://captionline.org/>

- 4) ちなみに、以下は大会後にわかったことだが、大会開催の約一  
月前に Zoom に複数のカメラ画面を固定させるマルチスポット  
ライトやカスタムギャラリーといった機能が搭載されている。  
結果論ではあるが、オンラインツールの仕様確認を前もってお  
こなっておけば、ある程度のバリアは防げた可能性もありえた  
のではないか。オンラインツールの仕様の変更は、随時チェッ  
クしておいた方がよいと思われる。